

呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と意味について

李 紫 娟

0. はじめに

イントネーションという音の高低変化は話し手の意図や感情を表し、文の種類を区別する働きをもつ。そして、従来のイントネーションの研究は、平叙文や疑問文、命令文などといった種類の文における文末や、文節末の高低変化に注目するものがほとんどであり、一語文としての呼びかけ語のイントネーションにおける研究はほとんど見られない。しかし、呼びかけ語というのは、イントネーションによってさまざまな意味やニュアンスを表すことができる。イントネーションは、呼びかけ語において、非常に重要な意味をになっていると思われる。そこで、本稿では呼びかけ語のイントネーションを音響分析した上で、その型と意味機能の関係について考察する。

1. 先行研究

従来のイントネーションの研究は、平叙文や疑問文、命令文などといった種類の文の文末、文節末に注目するものがほとんどであるが、その中で、郡 (1997b) はイントネーションを非常に広い視野の機能からとらえている。そして、郡 (2003) では、文末イントネーションと機能の関係について詳しく論述している。また、森山 (1997) は一語文のイントネーションに注目して、その [上昇調イントネーション] についてとらえているという点で、本稿が扱おうとしている呼びかけ一語文のイントネーションと関わっているため、以下ではそれらを紹介したうえで、問題点を探る。

1.1 郡 (1997b)

郡 (1997b) では、イントネーションの意味機能は、大きく「文法的機能 (a)」「情緒的機能 (b)」「社会的機能 (c)」の3つに分けられると述べている。

(a) 「帰る↑?」は質問文になる。

(b) 「いやだ」と言っているのに、声は全然嫌そうに聞こえない。

「いいですよ」と言っているのに、あまり乗り気ではないように聞こえる。

(c) 相手に対して丁寧な言い方をしようとする、音の長さも声の高さも変わる。

このなかで、最も重要なのは「文法的機能」である。さらに、イントネーションの文法的機能を、①フォーカスを表す機能、②単語どうしの意味の限定関係や意味的な一体性を表示する機能、③疑問

文などの文のモダリティ（ムード）を表示する機能、④大きな意味の区切りを示したり、発言がまだ終わっていないことを示す機能、と細かく分けている。そして、それぞれの機能は、次のような方法で表されるとされている。

- ①②アクセントの高低の変化を強調したり抑えたりすることで表される。
- ③文末の音調（声の上がり下がりの様子）を変えることで表される。
- ④文節最後の音を高めることで表される。

(郡1997b-172)

上でも述べたように、従来のイントネーションの研究は「文法的機能」を中心に考えられてきた。しかし、一語文のイントネーションの場合、「情緒的機能」「社会的機能」といった、より広い視野からとらえた機能も考慮する必要があると考えられる。そのような意味で、このような広い視点からイントネーションの機能をとらえた研究は、呼びかけ語のイントネーションの研究にとっても有益なものであろう。

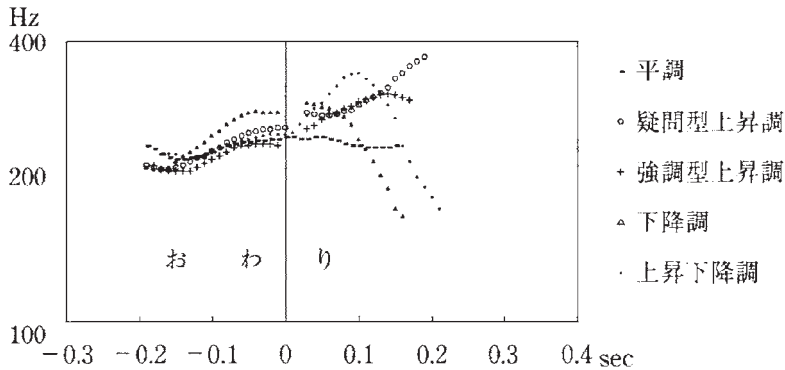
1.2 郡 (2003)

郡 (2003) では、文末のイントネーションと機能の関係について論じた。具体的には、アクセントによる音調の変化を捨象し、その音調の変化方向と表現機能の違いを基準として整理している。その上で五種類の文末イントネーションとそれぞれの機能を以下のように説明している。

- (i) 「疑問型上昇調」…疑問文の文末に典型的に現れるような直線的な上昇調
→聞き手に回答や反応を求める機能をもつ。
- (ii) 「強調型上昇調」…何度言ってもわからない相手に強調して言う場合に現れる上昇調
→否定されることを拒否するような強い主張に使われる。
- (iii) 「顕著な下降調」…音が下降するだけでなく、文末語のアクセントも強調され、文末母音も伸びる
→意外だと感じたことを示すもの。
- (iv) 「上昇下降調」…動きがほかの音調より大きく、耳につきやすい
→聞き手に注目をひきつけ、訴えかける意図を表す。
- (v) 「平調」…顕著な高低変化はない
→機能としても特別なものをもたない。

それぞれの音調曲線は、次の図のように分析されている。

図1 文末の音調



郡 (2003 : 113図6.1)

これら五種類の文末イントネーションの型および機能が呼びかけ一語文のイントネーションにおいても同じであるかどうかについては、3節で詳しく述べる。

1.3 森山 (1997)

森山 (1997) では、感動詞、接続詞などの独立成分、名詞、修飾成分、述語成分、誘導成分などの一語文と上昇調イントネーションとの関わりについて分析している。

ここでは、聞き返しの場合を除いて、上述のような一語文を上昇できる類と上昇できない類に分けて考察を行っている。そして、その結果として、上昇できる類のイントネーションは、疑問成分の後続を表示したり (a)、主張内容が提示されるものでは、その認定への疑問をあらわしたり (b) のような情報の探索的、非充足的な意味の具体的な実現であると証明している。

(a) あれ?、だから?

(b) 鉛筆で?、おもしろい?

森山 (1997) は広範囲にわたって一語文の [上昇調イントネーション] を考察しているものの、本稿の扱っている呼びかけ一語文はほとんど扱っていない (『『ねえ?』は、相手の注意がこちらに向いているかどうかまでの確認』の一箇所のみであった)。本稿では、森山 (1997) が広範囲にわたって一語文の [上昇調イントネーション] を考察した結果を呼びかけ一語文にそのまま適用することができるかどうか、そして、呼びかけ一語文における上昇調のイントネーションがどのような機能を持っているかについて考察する。

イントネーションに関する研究は多種多様なものがあるものの、呼びかけ一語文のイントネーションに関する研究はほとんど見られない。以下の考察では、従来の文末イントネーションの先行研究を

参考にしながら、考察を進めることにする。

2. 調査方法

2.1 調査対象

呼びかけ一語文のイントネーションを考察の対象とする場合、具体的な場面の中で生じる多様な現象を網羅的に観察する必要がある。しかし、自然談話からの用例収集は非常に困難であるため、本稿では、テレビドラマのセリフを対象にし、呼びかけ一語文の発話を生の音声データとして記録した。音声データは下記のとおり600例収集できた。音声データとは別に、該当場面のセリフはテキストに書き起こし、場面情報も付記した。なお、演技性をともなうドラマでの使用は自然談話での使用とは異なるのではないかという問題があるが、筆者、およびネイティブの見たところ、それが問題になるような例は、ほとんどなかったことを付言しておく。

ドラマ・『花嫁とパパ』（フジテレビ2007年6月26日放送終了）全12回うちの1-8回（339例）
・『泣かないと決めた日』（フジテレビ2010年3月16日放送終了）全8回（261例）

2.2 対象とした用例の範囲

今回採集した600例は、大きく、独立した呼びかけ一語文と、文と共に起る呼びかけ語に分かれる。独立した呼びかけ一語文とは、呼びかけ語の前後にそれと関係づけられる文が存在しないものであり、文と共に起る呼びかけ語とは、呼びかけ語の前後に何らかの文を接続する一語文である。それぞれの典型例（1）（2）を挙げる。

（1）仲原：{立花に向かって走りながら} 立花さん。…………… [独立した呼びかけ一語文]

立花：{予想どおりのことだったが、驚くふりをして、立ち上がる} 仲原さん。(泣)

（2）藤田：{立ち上がって、大声で} 西島君、もっと食い込みなさいよ！（泣）

…………… [文と共に起る呼びかけ語]

そして、独立した呼びかけ一語文には、呼びかけることを通して聞き手に何かをさせようと働きかける意図をもつもの（働きかけ的なもの）と、発話現場で生じた事態への反応として現れるもの（受け手的なもの）がある（李2011参照）。一語文の呼びかけ語は、基本的には、この二つのいずれかになると思われる。以下（3）（4）に例を挙げる。

（3）賢太郎：（愛子に向かって）シュンイチ ナルミの携帯番号、教えろ

愛子：絶対、嫌（と拒否する）

- 賢太郎：同僚の三浦君
 三 浦：あっ、いや、あの {顔を別の方向へ向ける} (花) …………… [働きかけのもの]
 (4) 房 江：はっきり申し上げます。お嬢さんとは結婚させられません。
 賢太郎：うちも、娘を嫁にやるつもりはありません。
 三 浦：{驚いている表情で賢太郎を見る} 宇崎さんのお父さん
 房 江：なら、どうしていらしたんですか？ (花) …………… [受け手的なもの]

表1 対象とした用例

呼びかけ語	呼びかけの性質	計	合計
独立した呼びかけ一語文	働きかけの	43	163
	受け手的	120	
文と共起する一語文		327	
合計		600	

呼びかけ語が文と共起する場合、その前後の文の影響を受けて、呼びかけ語のイントネーションが変わることがあるため、本稿では、もっとも単純で純粋に独立してもちいられた呼びかけ一語文に限定する。さらに、そのうちの基本的な用法と思われる働きかけのな呼びかけ一語文を対象とする（表1参照）。

2.3 調査方法

本稿では呼びかけの発話を音響分析するが、実際の生データは、呼びかけ語の語形、アクセントなどさまざまであり、話し手も多種多様である。さらに、発話環境、雑音、BM（背景音楽）などが加わり、生データの呼びかけ語を同一基準で扱うことは不可能である。そこで、本稿では次のような方法をもって、条件を斉一にして分析を行った。

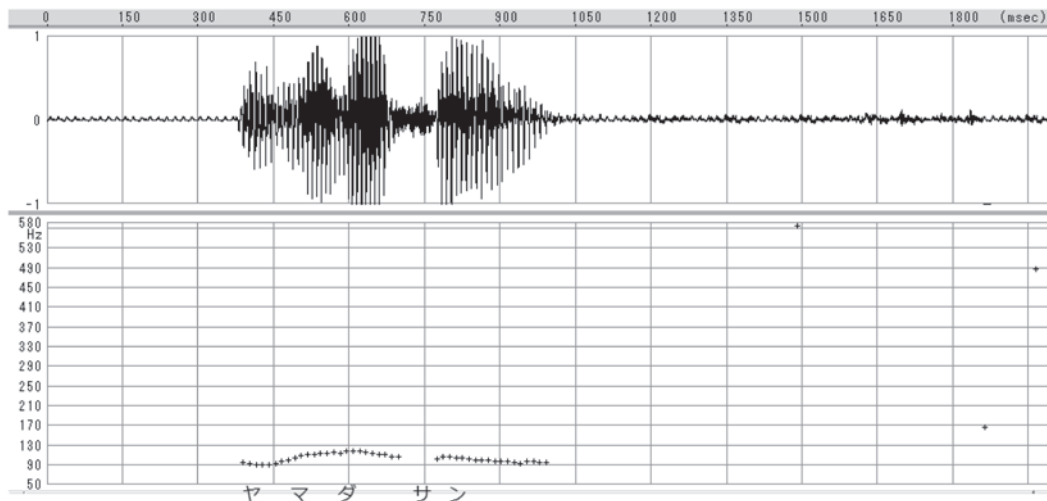
- ・実際の発話データから典型例10例を選び出し、日本人ネイティブにそのイントネーションを模倣してもらい、録音した。その場合、呼びかけ語はすべて「山田さん」という核のない平板型アクセントに統一してある。
- ・模倣してもらったネイティブは男女二人を起用した。なお、両者で模倣された音声のイントネーションは、ほぼ一致し、また、元のテレビのデータと照合した結果、ほぼ一致していることが確認された。
- ・使用するソフト：SUGI Speech Analyzer（ANIMO製）

以下では、男性の方の音声を分析の直接データとして利用し、それに現れた型とその意味機能を考察する。

3. 考察

まず呼びかけとしてではないニュートラルに単独で発話された「山田さん」のピッチを図で示すと、以下のようである。

図2 ニュートラルなピッチ曲線



呼びかけでない単独で発話された「山田さん」のピッチ曲線を分析すると、全体の高さの変化の範囲は90Hz~120Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分(ダ)の強さは-0.1dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-2.8dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは217msであり、全体610msの35.6%を占めている。

以下、働きかけの呼びかけで発話された「山田さん」を上記のニュートラルな発話と比較しつつ、分析する。

結論から言うと、上記の対象データを分析したところ、呼びかけ語のイントネーションは大きく [上昇調イントネーション]、[下降調イントネーション] の二つのタイプが観察された。以下では、(5) ~ (16) で実際の発話データを示し、ピッチ分析では、「山田さん」に置き換えた発話の分析データを示す。

I 上昇調

下の二例は [上昇調イントネーション] のパターンをなしている。例5は「呼び出し」の場面の発話であり、例6は「注意喚起」の場面の発話である。

(5) [三浦と愛子は会議室の中で、鳴海俊一のことについて話し合っている]

宇 崎：へえー。でも、ゴーマンって、どういう意味なんですかね？

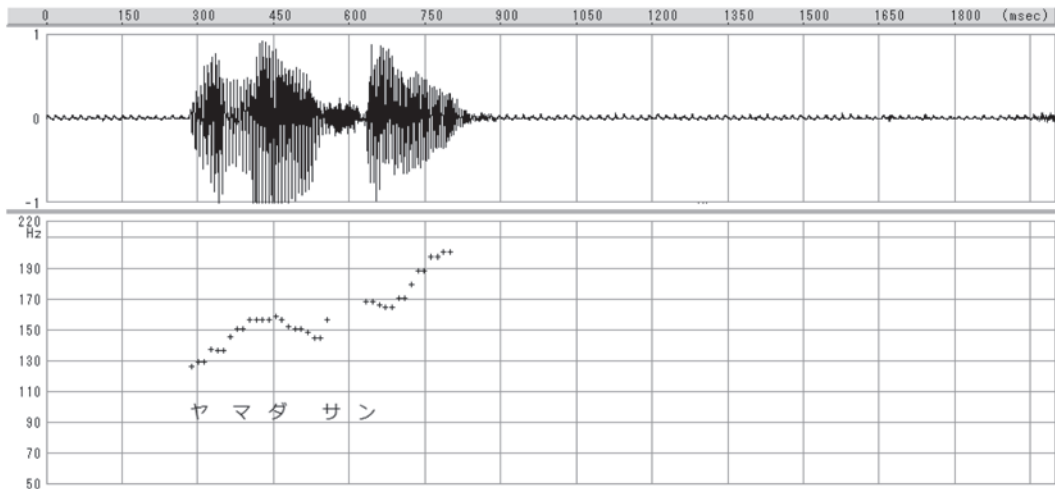
三 浦：それ、ゴーマンじゃなくて、傲慢だと思っ…

榎 原：{会議室の外から}

¹三浦君、宇崎さん

ふたり：はい。{外へ出る} (花)

図3 上昇調イントネーション1

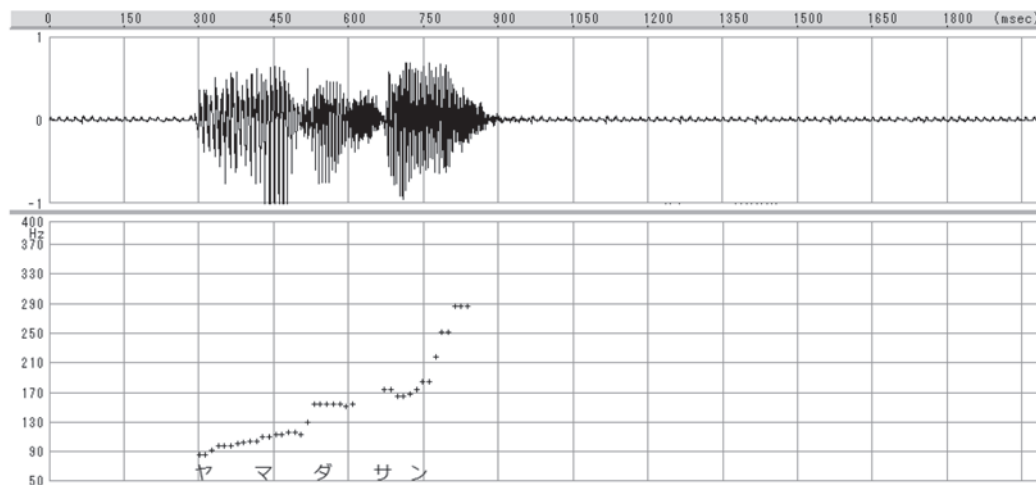


この [上昇調イントネーション1] の全体の高さの変化の範囲は135Hz~206Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (マ) の強さは-1.4dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-2.7dBである。前半部分が後半部分よりやや強いことがわかる。そして後半部 [(s) aN] の長さは182msであり、全体の520msの35.0%を占めている。

(6) 初音：{よそ見しながらコーヒーを運んでいる宇崎に向かって注意する} あっ、宇崎さん

宇崎：{あわててしまい、目の前にいる安奈の洋服にコーヒーをこぼす} あっ (花)

図4 上昇調イントネーション2



この〔上昇調イントネーション2〕の全体の高さの変化の範囲は92Hz～280Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部〔ja ma da〕における最も強い部分（ダ）の強さは-1.6dBであり、後半部〔(s) aN〕の最も強い部分の強さは-2.9dBである。ここでも前半部分が後半部分よりやや強いことがわかる。そして後半部〔(s) aN〕の長さは199msであり、全体の564msの35.3%を占めている。

以上のような〔上昇調イントネーション〕は、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」とと比較すると、周波数は全体的に高く、強さについては全体的に弱い。また長さについては短いことがわかる。

そして、〔上昇調イントネーション〕をもちいて相手に呼びかけるのは「呼び出し」、「注意喚起」の場面のほか、下の例7「促し」、例8「呼び戻し」の場面にも同じようなパターンが現れる。

(7) 賢太郎：シュンイチナルミの携帯番号、教えろ

愛子：絶対、嫌

賢太郎：同僚の三浦君

三浦：あっ、いや、あの {顔を別の方向へ向ける}

賢太郎：俺の言うことが聞けないのか？（花）

(8) 榎原：{遠くから近づきながら} 岡崎さん {立ち止って、安奈に向かって} 悪いんだけど、子供たちの面倒見てきてもらえる？

金山・岩倉：{話を聞いて、子供の面倒を見に行こうとして、立ち去る}

岡崎：{愛子の顔を見たまま、金山と岩倉を呼び止める} 金山、岩倉

金山・岩倉：{愛子のそばに戻る}

金 山：宇崎さん、行ってきて（花）

詳しく観察すれば、[上昇調イントネーション]が使われる際の人間関係においては、目上から目下に使われることが多く（5例）、そのほか同輩同士にも使われる（3例）。そして、目下から目上への[上昇調イントネーション]をもちいた呼びかけは不自然であると考えられる（0例）。また、このような[上昇調イントネーション]がもちいられた例においては、すべて話し手の意向に「矛盾」（井上1993²）（働きかけにおける意図のギャップ）しないと想定する（例5、8）か、「矛盾」することが許されない（例7）か、といった状況が共通している。

このような音調は第一音節から最後の音節まで直線上昇形であり、型からいえば、郡（2003）の「疑問型上昇調」にあたるものであろう。しかし、呼びかけ語に加わった結果、聞き手に回答や反応を求めるというより、話し手と聞き手の間に「矛盾」が存在しない³ことを前提にした相手への行動要求となっている。その場合、上昇調の呼びかけを通して相手に情報を提示した上で、相手の行動まで働きかけるという機能をもつ。また、郡（2003）のいわゆる「強調型上昇調」にあたるものは、現段階で調べたところ、呼びかけ語においてみられなかった。それはこのような話し手と聞き手の間に「矛盾」があることを前提にしている場合、呼びかけという言語行為において、下降調をもちいることが一般的であるからだと思われる。

そして、相手へ呼びかける場合、[上昇調イントネーション]は丁寧に欠けていることがいえると思われる。つまり、従来言われてきた「声を高くすると丁寧に聞こえる傾向がある」ことは、呼びかけにおいては反対であるということになる。

II 下降調

[上昇調イントネーション]が主に、「呼び出し」「注意喚起」「呼び戻し」「促し」に使われるのに対して、[下降調イントネーション]は主に、「叱り」「促し」「制止」「呼び戻し」「意識の喚起」に使われる。そして、[下降調イントネーション]には、[緩やかな下降調イントネーション]、[急下降調イントネーション]と[平-急下降調イントネーション]の三つのバリエーションが含まれる。

II 下降調-①急下降調

[急下降調イントネーション]は、主に「促し」、「呼び戻し」と「制止」の場面の発話にみられる。図5は例9の「促し」の場面の発話からのものである。

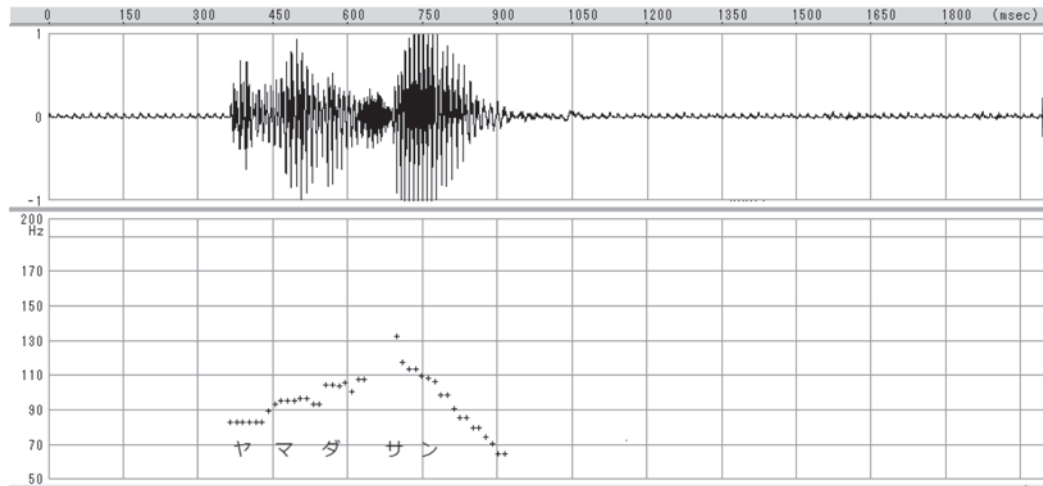
(9) 美奈子：{渡された紅白饅頭を手にとって見る} 紅白饅頭?

賢太郎：うん。

美奈子：{かごにある紅白饅頭を見ながら} どうするの?こんなに買い込んで

賢太郎：{愛子の方を見る} 愛子 {愛子に紅白饅頭を配らせようとする}
 愛子：{嫌そうな顔で} 絶対に配らないから (花)

図5 急下降調イントネーション



例9は、相手に嫌な気持ちがあることがわかっているにもかかわらず、呼びかけによって、相手に動作の実行を促している場面である。この[急下降調イントネーション]の全体の高さの変化の範囲は60Hz~135Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分(マ)の強さは-3.5dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-1.2dBである。後半部 [(s) aN] の長さは182msであり、全体の長さ600msの30.3%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、全体的周波数について、ニュートラルの場合の一番低い部分より低く、ニュートラルの場合の一番高い部分より高いことがわかる。そして強さについて、ニュートラルの場合と逆に、前半部よりも後半部が強いことがわかる。また長さについて、全体的にはほとんど変わらないものの、後半部はより短いことがわかる。

このような[急下降調イントネーション]をもちいる例は「促し」2例、「呼び戻し」3例、「呼び止め」2例と「制止」4例の合計7例がみられ、そのうち、目上から目下に使われたものが6例あり、目下から目上に使われたものは1例のみであった。そして、基本的に目上から目下に使われることが、上記の[上昇調イントネーション]と共通する。以下では、目下から目上に使われる例をみよう。

- (10) 賢太郎：憧れだけで、就職したような娘ですが、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、これはないと思うんですが、あのー、たとえば、もし…もしも、いじめとか…
 金山：いじめ!?

- 愛子：お父さん、何言ってるの？
- 金山：ふーん、うちで、私の悪口、言ってんだ
- 賢太郎：あっ {手を振る}
- 愛子：{頭を左右に振りながら} 言ってません、悪口なんて
- 金山：{席を立つ} お父さん、ご心配なく、すぐにアシスタントを代えてもらいますから。
- 愛子：先輩
- 金山：脇田さんのことも知らないような素人とは仕事できないの。(花)
- (11) 房江：{三浦に振り向く} 言うこと聞けないんなら、親子の縁、切ってもいいのよ。それでもいいなら、勝手になさい。 {立ち去る}
- 三浦：{席を立って、房江を追いかける} お母さん {房江の前へ回る} (花)

例11は、話し手が自分の結婚したい相手のお父さんをおいて立ち去ろうとしている母に強い不満もっている場面で、その相手呼び戻している。

この例からもわかるように、[急下降調イントネーション] がもちいられる場面は基本的に、目下にもちいることが [上昇調イントネーション] と同じであることに対して、話し手の意向に反することが存在していることは、[上昇調イントネーション] と対立している。

このような音調は、形についていえば、前半部は直線上昇形をなしており、そして前半部の頂点から後半部に入って直線下降の形をなしている。そして強さは、下降につれ強まってくる。後半部イントネーションの型からいうと、郡 (2003) であげられた [顕著な下降調] にあたるものであろうが、その機能は、郡 (2003) がとりあげた [強調型上昇調] と同じであると思われる。つまり、急激な下降調をもちいた相手への呼びかけによって、自分の意図に反している相手に対して、動作を強く求めている意を有していることを表している。

II 下降調一②緩やかな下降調

[緩やかな下降調イントネーション] は、(全体についていえば、) 徐々に上がってから、文末では緩やかに下降するイントネーションである。このような音調がもちいられるのは、ほとんど「制止」の場面の発話である。

- (12) [小滝は愛子の会社の取り引き先になる可能性があったが、愛子のミスでダメになってしまった。父の 賢太郎は愛子が謝っているのを見て、事情を少し聞いて、小滝をしかる]
- 賢太郎：あんたもあんただ。子供が汚したぐらいで目くじら立てて。
- 小滝：何？
- 賢太郎：どんなに高い服だろうが、子供服なんて、作業着みたいなものでしょう。

小 滝：偉そうに！

愛 子：{びくびくしながら} お父さん…

賢太郎：ちょっと貸せ。{愛子の持つてるボールをとる}

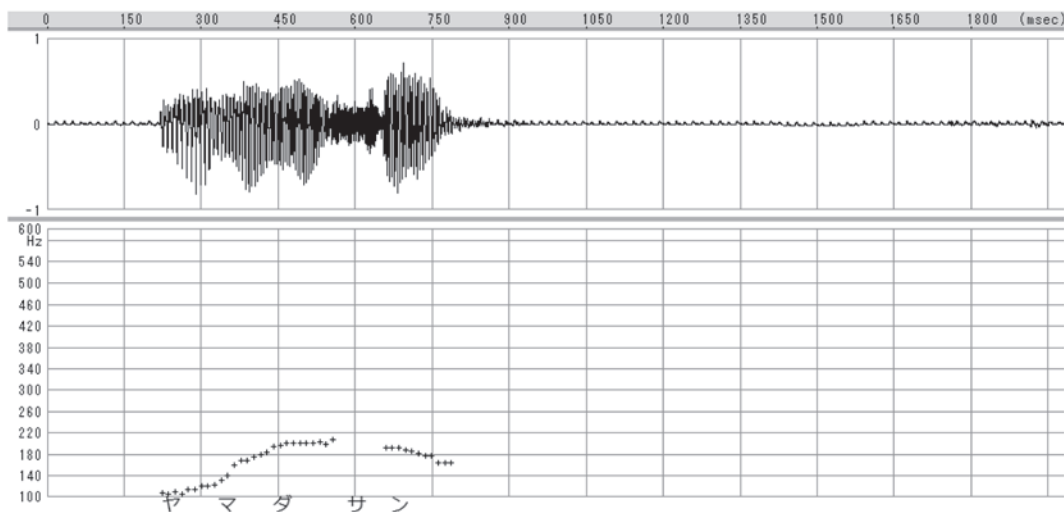
あんた、子供とキャッチボールやったことありますか？

小 滝：そんなことする必要はない。

賢太郎：……服が汚れるぐらい、いいじゃないですか？子供が笑ってくればそれだけで幸せじゃないですか。親って、そういうもんでしょう！？ {周りの雰囲気を感じて}

あっ…、悪い。ちょっと、熱くなりすぎました。(花)

図6 緩やかな下降調1



全体の高さの変化の範囲は107Hz～194Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (マ) の強さは-3.6dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-3.3dBである。前後の強さはほぼ同じ結果となっている。後半部 [(s) aN] の長さは100msであり、全体の長さ540msの20.4%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、周波数は全体的に高く、そして強さについては、全体的に弱く、長さについては全体も、後半部も著しく短いことがわかる。

同じく、例13も、話し手は先行文脈からその相手がすべきではないことをしていることを受け、それを「やめさせる」という「制止」場面の発話である。

(13) 賢太郎：お前はまだ…

愛 子：もう子供じゃない！私はお父さんと対等に話がしたいの！なのに、いつも頭ごなしに、ダメだダメだって

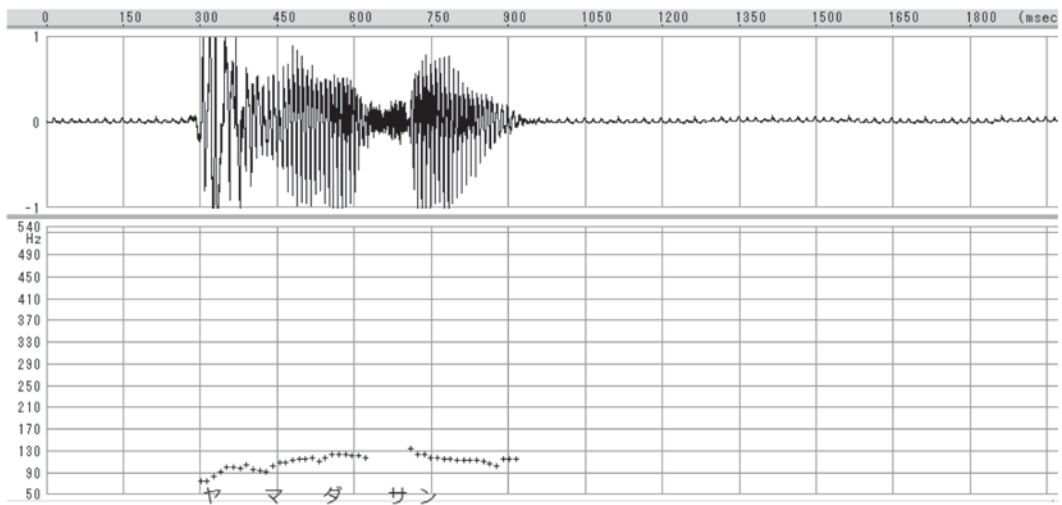
賢太郎：俺は父親として…

愛 子：お母さんがいてくれたら、きっと違ったかもしれないね。お母さんなら、きっと私の味方になってくれた。お母さんがいてくれたら、よかったのに。

三 浦：宇崎さん

賢太郎：泣く (花)

図7 緩やかな下降調2



全体の高さの変化の範囲は97Hz～129Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (ヤ) の強さは4.5dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-2.6dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは202msであり、全体の612msの33.0%を占めている。ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、周波数も長さもほぼ変わらない。しかし強さについては、後半部分よりも、前半部分の特に語頭部分が強いことがわかる。

緩やかな下降調イントネーションの感情は急下降調ほど激しくないため、気持ちなどを配慮するときにもちいられやすい。そして、[急下降調イントネーション] と話し手の意図に反していることにおいて共通しており、[上昇調イントネーション] と対立している。そして、このような音調は急下降調の弱めの用法とみることができる。

II 下降調—③平—急下降調

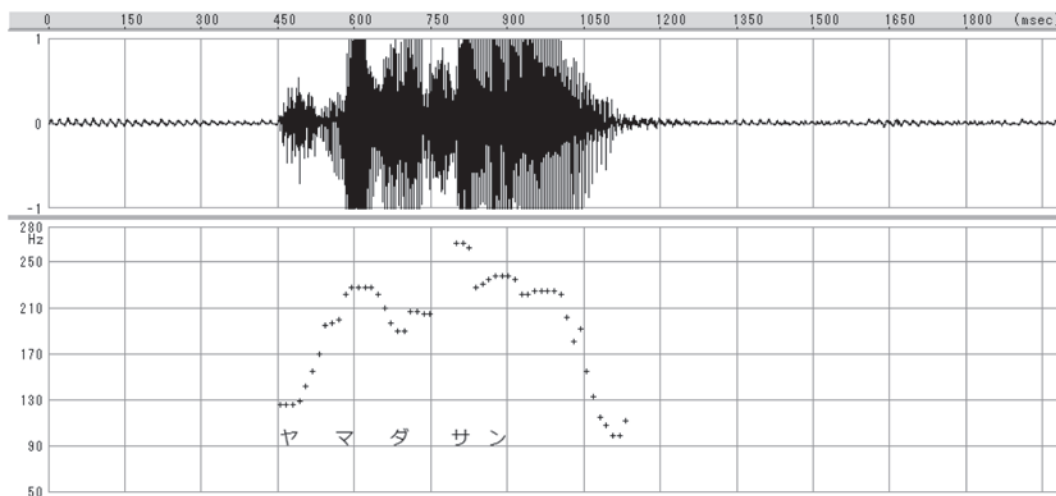
[平—急下降調イントネーション] というのは、呼びかけ語の後半部で一定の平坦な状態をたもつ

てから下がる音調のことである。

図8は平—急激な下降イントネーションをなしており、採集した例14の「意識の喚起」と例15の「呼び戻し」の場面にも同じようなパターンが現れる。なお、場面によって平坦な部分を保つ長さが多少異なることがある。図8は平坦な部分が長いものであり、図9は短いものである。

- (14) 三 浦：{賢太郎に向かって} お願い…します… {意識を失って倒れる}
 愛 子：三浦さん!? 三浦さん！三浦さん！ (花)

図8 平—急下降調イントネーション1



全体の高さの変化の範囲は97Hz～261Hzの間である。語尾部分の高さの変化の範囲は261Hz～97Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分 (マ) の強さは2.9dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは1.3dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは241msであり、全体の575msの41.9%を占めている。そして、ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、周波数は全体的に高いほか、強さについても全体的に強い。また長さについては、全体的に短いものの、後半部が著しく長いことがわかる。

これは意識を失っている相手に対しての呼びかけであり、相手を自分の声に反応させよう、答えさせようとして強く相手に働きかけている。このとき、声は非常に大きく、後半部の平坦を保っている部分も非常に強く、かつ長くなっている。これは呼びかけ語における強調型下降調イントネーションとみなすこともできると思われる。

また、同じような [平—急下降調イントネーション] をもちいているのは、例15「呼び戻し」の場面である。それぞれ場面も異なり、実際の音調も多少異なるが、いずれも急な状況にあり、聞き手と

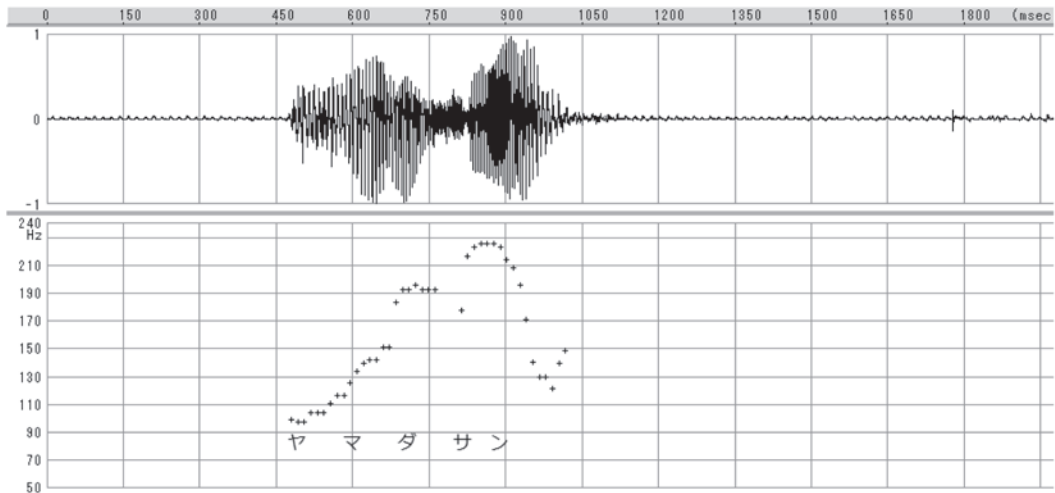
の間に大きな「矛盾」のあることが共通している。

(15) 努：{小滝と出ていくところ、突然手を離して、後ろにいる愛子に向かって走り出す}

小滝：{あわてて努を見る} 努！

努：{お父さんを無視して、愛子の前まで走る} お姉ちゃん、ありがとう！（花）

図9 平—急下降調イントネーション2



全体の高さの変化の範囲は92Hz～225Hzの間である。語尾部分の高さの範囲は225Hz～92Hzの間である。そして強さについて言えば、前半部 [ja ma da] における最も強い部分（マ）の強さは-2.9dBであり、後半部 [(s) aN] の最も強い部分の強さは-1.4dBである。そして後半部 [(s) aN] の長さは183msであり、全体の533msの34.3%を占めている。ニュートラルに単独で発話された「山田さん」と比較すると、周波数が全体的に高いほか、強さについては逆に後半部が強い。また長さについては、全体的に短く、また後半部も短いことがわかる。

例14、15のような「意識の喚起」、「呼び戻し」以外に、例16「叱り」の場面にも同じようなパターンが現れる。

(16) [宇崎愛子が就職したばかりのある日、仕事帰りに高い服などを買いこんで、家に帰る]

賢太郎：それ全部、店に返してこい。 {荷物をとろうとする}

愛子：逃げる 嫌よ！ 自分のお金で、何、買おうが、わたしの勝手じゃない。

賢太郎：愛子！

愛子：もう親のスネ、かじってるわけじゃないんだから。

賢太郎：嫁入り前の娘は親の言うことを聞くもんだ！（花）

以上に〔平—急下降調イントネーション〕を見てきた。これらは、場面によって、平坦な部分の長さ、および下降の部分の下降の度合いが異なるものの、〔平—急下降調〕として共通しており、強調型下降調とみなすべきと思われる。

〔緩やかな下降調〕は〔急下降調〕の弱めの用法であるのに対して、図8、9のような〔平—急下降調〕は、単純な〔急下降調〕の強調型と思われる。そして、それがもちいられる場面は、急な出来事が発生していることと、声大きいことが共通している。したがって、このような音調は、話者が緊急な出来事に直面して、その出来事が話し手の思いと大きなギャップ、つまり大きな「矛盾」がある場合、自分の求める行動を呼びかける相手に強く働きかけようとする効果を持つ。

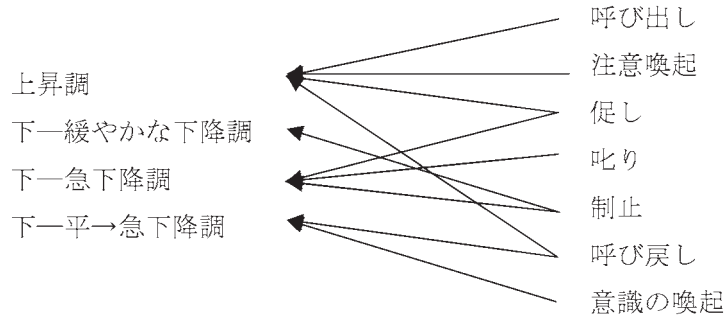
以上のように、〔下降調〕は、〔上昇調〕と異なり、話し手と聞き手との間に「矛盾」がある場合に用いられる。そして、〔下降調〕の中では、〔緩やかな下降調〕〔急下降調〕〔平—急下降調〕の順で「矛盾」の度合いが大きくなっていくと考えられる。

4. まとめ

以上、見てきたように、単独で発話された呼びかけ語のイントネーションは、大きく〔上昇調イントネーション〕と〔下降調イントネーション〕に分かれ、前者と後者の違いは、話し手と聞き手の間にある「矛盾」つまり意図のギャップの有無であると見られる。後者は、さらに〔緩やかな下降調〕〔急下降調〕〔平—急下降調〕に分かれる。その3つの違いは、話し手と聞き手の間にある「矛盾」の大きさの違いによる。このことは、上述の音響分析の結果と対応しており、ニュートラルに単独で発話されたものと比べても、この順でピッチの幅が大きくなり、また全体の長さが長くなるなどの点が見て取れる。別の言い方をすれば、この順で感情が加わっていくともいえる。

これらイントネーションの型と呼びかけの機能との対応をまとめると（下図参照）、まず、〔上昇調イントネーション〕をもちいる場面は主に「呼び出し」「呼び戻し」「注意喚起」と「促し」がある。これに対して、〔下降調イントネーション〕による呼びかけは、「叱り」「促し」「制止」「呼び戻し」「意識の喚起」がある。〔下降調イントネーション〕はいずれも話し手と聞き手の間に「矛盾」がある場合であり、自分の意図に反している相手に対して、強制的に働きかけようとする意識が強く働いていることを表す。以上の機能のうち、「促し」「制止」「呼び戻し」は複数のイントネーションの型と対応している。この場合、「促し」「呼び戻し」においては、相手と自分の間に「矛盾」の有無によって、〔下降調〕と〔上昇調〕に分かれる。また「制止」においては、その「矛盾」の強さによって、急激な〔下降調〕と緩やかな下降調に分かれる。より詳しくいえば、相手と自分の間に「矛盾」がない場合の「促し」「呼び戻し」は〔上昇調〕をもちい、相手と自分の間に「矛盾」がある場合の「促し」「呼び戻し」は〔下降調〕をもちいる。そして、相手に対して、強く制止する場合には、ピッチの幅

が大きくなった「急下降調」をもちい、相手の感情、あるいはその場の雰囲気などを配慮する場合の控えめの「制止」は、ピッチの幅が小さくなった「緩やかな下降調」をもちいる。



今回残された課題としては、同じく呼びかけ一語文に属する「受け手的な呼びかけ一語文」のイントネーションの特徴および機能、さらに、「働きかけ的な呼びかけ一語文」との異同の問題がある。また、今回の調査において、郡（2003）であげられた「上昇下降調イントネーション」はみられなかった。これらに対して、調査の資料を広げて調べる必要があると思われる。

注

- 1 用例中のブランク（空白）は前の話者の発話が終わらないうちに次の話者が話し始めたことを示す。
- 2 井上（1993）では、「矛盾」について、「話し手側のスクリプトと矛盾する事柄が存在する」ことを前提にして発せられるか（矛盾考慮）、話し手側のスクリプトと矛盾する事柄が存在しないことを前提にして発せられるか（矛盾非考慮）」というように解釈している。そして、その「スクリプト」について、それが、命令文における「スクリプト」として、

- (i) 実行すべき動作の内容
- (ii) 動作実行のタイミング

二つの要素からなる一種の「すじがき」としてとらえ、それを「スクリプト」と呼ぶ。

と規定している。

- 3 例7は、話し手と聞き手の間に対立の存在が許されない場合であるが、本稿において、このような場合は、話し手と聞き手の間に対立が存在しないと見なす。

参考文献

- 井上優（1993）「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』」『国立国語研究所報告105研究報告集14』、pp.333-360、秀英出版
- 郡史郎（1997b）「日本語のイントネーション」『日本語音声2ーアクセント・イントネーション・リズムとポーズ』、pp.169-202、三省堂
- 郡史郎（2003）「イントネーション」『朝倉日本語講座3ー音声・音韻』、pp.109-131、朝倉書店
- 天沼寧・大坪一夫・水谷修（1978）「日本語の韻律」『日本語音声学』、pp.135-159、くろしお出版
- 森山卓郎（1997）「一語文とそのイントネーション」『文法と音声I』、pp.75-96、くろしお出版